

## 美術館の舞台裏

—魅せる展覧会を作るには—

著者：高橋明也 芸大卒 三菱一号館美術館初代館長

今、新しく変わりつつある“美”の殿堂で何が起こっているであろうか。

人間社会の中で、人が美術にどう感応し、それを展示する美術館がどんな役割をしてきたか、人間と人間社会の進歩と価値観が変容する中で、文化である美術品をどんな観せ方をするのが望ましいのか、又、国や社会にも役立つのか、高橋明也氏の「美術館の舞台裏」は将来を考えさせられるテーマを示唆している野心的な著述である。 先ず、1997年にスペインのビルバオ市に建設されたビルバオグッゲンハイム美術館が開館し、衰退したこの小都市がテーマパークさながらに観光地に変貌を遂げ、経済効果を上げ、ビルバオ効果と呼ばれて、ヨーロッパで注目を浴びた。



ビルバオグッゲンハイム美術館

ソフトは経営危機に陥ったニューヨークのグッゲンハイム美術館の、親財団が提供しハードは世界的設計者、フランク・ゲーリーの幻想的設計で夢の美術館を出現させて周囲をアッとさせた出来事を、切り口に説明している。

後半では昨今、中東、東南アの途上国にてアートプロジェクトが活発になり、今年中にアブダビに、ルーブル・アブダビ美術館が開館され、更に2017年にグッゲンハイム・アブダビ美術館の開館予定になっている他、中国も豊富な資本力を誇示して、大きな企画を持っている現状を伝えている。

翻って、日本の美術と美術館の展開について、著者の言葉を借りると、明治維新後始めて、「芸術」という概念が輸入されたため、美術界が充分熟成せぬ時期に、マスコミ系が展覧会開催の中心にいた事情もあり、集客できる有名アーティストの美術品を展示する単純な、エンターテインメントの域を出ない催し物として終始した経緯を指摘している。



国立博物館

パブリック・スペースとしての美術館誕生を見ると、大英博物館は1759年、ルーブル美術館は1793年に対し、日本の国立博物館は1872年であった。芸術環境の生成に100年の差があるばかりか、フランスの場合革命で宮廷や領主の占有された芸術を市民の手に取り込んだのと違い、日本の場合正倉院の御物や優れた仏教美術、工芸品、構築物などという”お宝“を

持ちながら、芸術という概念で一般に展示するコンセプトが育たぬまま、“拝観“はできても”鑑賞“する環境には至らなかった。今日のIT技術を駆使すれば、損傷を恐れる”宝物“も、本物同等のレプリカや映像を用意して同時展示することで、世界基準で充分鑑賞に供することが出来るし、日本の芸術品である“お宝”が身近に体感され、同時に世界にアピールできる。

今の国立博物館、正倉院の展示など、まだ距離を置いた拝観では、日本文化を客観的に把握する機会を持ってない上、世界の日本研究者を呼び込むことはできない。その点日本の重要文化財の管理は、保管が主で、文化遺産の公開に消極的でやや官僚的である。

この本の示唆するものは、芸術と文化が集中的に体感できる魅力ある都市機能を持てれば、世界の文化人を惹きつけることが出来るし、経済と技術重視の現状よりも国の品格も上がり、質の高い来日者を幅広く迎え入れることになり、魅力ある都市に変貌できる。いうまでもなく、ルーブル美術館があるからパリに引き寄せられるように、ニューヨークのメトロポリタン美術館、マドリッドのプラド美術館などのように、都市の中心に広場、美術館、劇場、オペラハウスなど芸術と文化を集中的に発信できる機能を持つことで、文化国家の都市の魅力が輝いているのが判る。



チューリッヒ美術館、モネの部屋

本書は美術館のあり方、展覧会の作り方に、歴史的に想像以上のドラマがあったことを細かく説明していて、興味津々であるばかりか、日本の美術館の学芸員は、絵画の解説者に思われがちだが、美術館の実質的なプロモーターは優れたキュレーターであり、ヨーロッパでは社会的な地位も高く、各国の美術界の代表者たちと対等に渉りあえる知見の持ち主でプロデュースできる人材であることなど例を挙げて説明があり、いい展覧会を成功させるには、今日は国際的連携が不可欠なグローバルな展開になっていることが良く判る。

著者、高橋明也氏はオルセー美術館の開館準備室に在籍し、経験豊かなキュレーターとして丸の内の三菱一号館美術館の初代館長に就任し、ユニークな「ラトゥール展」で世界中から作品を集め成功したがこの経緯を詳細公開して説得力がある。



中々見られない  
日本のお宝の一つ

加えて、平成 22 年に開館した、三菱一号館美術館は馬場崎門の一丁ロンドンの一廓のブリックスクエアの旧ビルの部材を使って復元し、緑豊かなゾーンの中の美術館として、丸の内に文化の風を吹き込んだことを、アピールしている。

さて、戦後 70 年経って、日本の鑑賞者の視線の変化、美術鑑賞の観方の成熟度が高く、美術館の運営や行政上の課題はあっても、これはという展覧会は鑑賞者が殺到している。主催者側は良いが、簡単に見られぬ状況がある。如何に、楽に、理解しうるように鑑賞できるか展覧会のあり方に、更に工夫が必要で、課題は尽きないのである。

(平成 28 年 5 月 20 日 久津正行)